

11  
35

子規遺墨

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



子規遺墨

中村不折先生題字  
前田剛二氏彫刻

●墨汁一滴 規

各自専門の学藝技術に熱心なる人は少くもあらぬど不折君の畫に於ける程熱心なるは少かきべし。いつ逢ふてもいつ迄語つても苟も人に逢ひて之と語らば終始畫談をなして倦まが、筆あらは直に筆を取つて戲画を画き或は説明のたために種々の画をかく。故に其時を嫌はが處を擇ばが宴會の席にても衆人の中にも人は酒を飲み妓をいやかしつゝ、あざむきにても不折君は獨り画を画き画を談ず。其熱心

實に感おるに餘ありといへども若し一般の人より見  
は餘り熱心過ぎて却てうるさしと思ふ所多からん。  
然れども不折君はそれ程人にうるさからず●  
であらべし。これ君の聲なきが為のみ。

大正 10 12 内交  
は 夫ら

君が勉強は信州人の特性に出づ、されど信州人といへ  
ども君の如く勉強するは多からざるべし。君は自分の  
ためにも勉強し人に頼まれても勉強す。一枚方二尺位  
の油画を画く為に毎日郊外二三里の処に行きて一ヶ月  
も費したる事居あり。一昨年の初夏なりけん君

カンヴァスを負ふて澁川に行き赤城山を寫す。廿餘  
日を経て五尺許りの大幅見事に出来上りたる積りに  
て得々として歸り直に淺井氏に示す。淺井氏曰く場  
所廣くして遠近さだかならず子若し此画を画とせんと  
ならば更に一週の日子を費して再び澁川に往けと。  
君の辭は淺井氏よりの歸途余の病牀を訪はれしが  
其時君の顔色たゞならず聲ふるひ耳遠しく非常に  
激昂の様見え<sup>しかば</sup>余は君が旅の勞れと今日の激昂  
との爲に熱病にぞかろりはせおやと憂ひたる程なり。

何ぞ計らん其翌日君は再びカンヴァスを抱へて流川  
に到りナクに書き直して一週間の後歸京せり。  
余は今更に君が不屈不撓の勇氣に驚か  
かざるを得ざりき。此画は煙と題して展覧會  
に出でたる者なり。(宮内省御用品となる)是等は  
皆自分のために勉強したる例なり。

画家は多くは其性疎懶にして人に頼まれたる事も期  
日迄に出来るは甚だ少きが常なり。然るに不折君は人  
に頼まれたる程の事、尽く之に應ずるのみならず其

期日さへ誤る事少ければ書肆などは其だ君を  
重寶がりまたなきものに思ひて教科書の挿画、  
其他書籍雑誌の挿画及び表紙を依頼する者  
絶えず。想ひ起す今より七八年前桂舟の画天下に行  
はれ桂舟の外に画家なしと迄思はれたる頃なり。其  
博文館にても何かの挿画を桂舟に頼みしに期に及  
んで出来ず、館主自ら車を飛ばして桂舟を訪ひ頭  
を下け辞を卑うし再三繰返して懇々に頼み  
居たる事あり。それを思へば期日を

雑誌などの挿画かきとして敏腕に<sup>延す</sup>且つ規則的  
なる不折君も得た。博文館の喜び察すべきな  
り。其外君の前に書畫帖を置いて画を乞ふ者あれば  
君は直に筆を揮<sup>ふ</sup>て画を成す。為山●氏の深思熟  
考する者と全く異なり。只君が容易に依頼者を  
満足するの弊として往々粗末なる杜撰なる陳腐なる  
拙劣なる<sup>無趣味なる</sup>画を成す事あり。然れども依頼者は多く  
君の<sup>無趣味なる</sup>雷名を聞いて来る者画の巧拙は之を鑑別する  
の識なし。容易に君の揮毫を得たるを喜んで皆  
ホクホクとして歸る。是等は君が人に頼まれて  
勉強する一例なり。

終

